

Vol.40 No.5 2001.10

図書館の窓 5

東京大学附属図書館報 The University of Tokyo Library System Bulletin

目次

■ アダム・スミスゆかりの古典籍入手顚末	大学院経済学研究科名誉教授 大河内暁男	67
■ 平成12年度大型コレクション 英国外務省機密外交資料	大学院総合文化研究科教授 木畑 洋一	72
■ 図書館Webリクエストサービスを開始	附属図書館	76
■ 東京大学学位論文要旨データベースの公開について	情報基盤センター図書館電子化部門	79
■ 図書目録遡及入力、平成12年度実績報告及び平成13年度計画	附属図書館	80
■ 図書館(室)ニュース		82

アダム・スミスゆかりの古典籍入手顚末

大学院経済学研究科名誉教授 大河内 暁 男

経済学部図書館では、この度アダム・スミス旧蔵書1冊を購入し、さらに、名誉教授・大河内暁男先生より、アダム・スミスに係わる稀覯書2冊を寄贈していただきました。ご承知のとおり、アダム・スミスコレクションは、経済学部図書館が所蔵する代表的な貴重書ですが、ここに、新たに3冊を加えることとなりました。

この記事は、これら3冊についてご紹介いただくため、ご寄稿をお願いしたものです。

(経済学部図書館)

1. スミスゆかりの書物を集める

日本のアダム・スミス研究は現在なお世界に誇れる水準にある。そのスミス研究の言わば心のふるさとが、わが経済学部の「アダム・スミス文庫」である。経済学部図書館はスミス旧蔵書を多数所蔵していることで、知る人ぞ知る世界の図書館の一大拠点である。そこに本年さらに旧蔵書1冊とスミスに係わ

る稀覯書2冊が加わった。すなわち、Jacques-Benigne Winslow, *Exposition anatomique de la structure du corps humain*, Paris, Desprez et Desessart, 1732, 4to, xxx+740. (「人体の構造の解剖学的解説」、スミス旧蔵書)

[William Hamilton], *Poems on Several Occasions*, Glasgow, Robert and Andrew Foulis, 1748, 8to, 148. (「折々の詩」)
William Hamilton of Bangour, *Poems on Several Occasions*, Edinburgh, W. Gordon, 1760, 6to, vi+262p. (上掲「折々の詩」の第3版)

スミス旧蔵書の発見は久し振りのことで、これまで所在不明のものであっただけに、スミスに関心を抱く者としては、この1冊が目の目を見、安住の地をえたことを喜ぶたい。

現代の経済学が抱える問題も源を辿るとスミスに行き着いてしまうあの大きなスミス体系、経済現象のみならず、人間の思想行動について深く哲学的に考察した彼の幅広い思索は、いったい何を基盤にしていたのか、何を

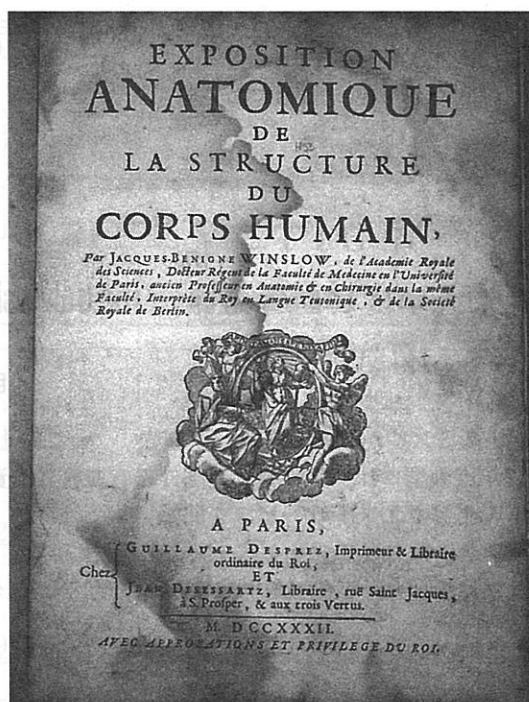
知識の糧とし、思想の骨肉としていたのか。彼の旧蔵書がその秘密を解く一つの鍵であることは間違いない。まさにそれ故に、彼の蔵書の全貌把握と保存に、日本及び英国の研究者が中心となって、これまで多くの努力を払ってきた。

経済学の鼻祖として万人の認めるスミスは、愛書家としても生前から知られていたが、彼の遺愛の蔵書のおよそ半分は、それを相続した縁者からエディンバラ大学に寄贈され、保管されている。だが、残る半分が分散してしまった。現在ロンドン大学ゴールドスミス文庫と東大のアダム・スミス文庫にかなりの数が集められてはいるが、しかし彼の蔵書目録(これは「アダム・スミス文庫」に所蔵されており、現在では脱落のあることが分かっている)から判断しても、なおかなりの書物が所在不明で、散逸から救う努力が続けられている。今回経済学部が入手したウィンスロウの著書も、まさにそうした過程での貴重な1冊なのである。

経済学部「アダム・スミス文庫」は、新渡戸稲造教授が大正9年12月にロンドンの古書肆で入手し、前年に独立した経済学部へのお祝いとして寄贈されたもの、131部303冊が本体である。新渡戸は「今日実際上の御参考にはならずとも経済学者の宝物とも申すべきものと被存候」と述べている。この文庫は、関東大震災と第二次大戦末期に疎開先甲府での空襲と言う二度の危機を切り抜けて、よく現在に至ったが、戦後さらに5部8冊が追加された。そして今回の1冊が加わって、現在の文庫の総数は137部312冊を数える。

2. ウィンスロウの辿った道

今回入手したウィンスロウの著書は、スミスが意外に多く所蔵していた博物学のグループに分類されるものであるが、スミス没後の本書の足取りを辿ると、スミス母方の従弟を経てその娘へ、そしてその息子 R.O. Cunningham (ベルファーストのクインズ・



『人体の構造の解剖学的解説』

カレッジ博物学教授)に引継がれ、1902年にカニンガムが知人の Symington 教授に贈ったという来歴をもつ。新渡戸教授が1920年に入手した303冊は、このカニンガムが1918年に没した後に売りに出されたものであったことが分かっている。かくて1902年に仲間から別れたウィンスロウの一冊は、恐らくスミス蔵書の意味をさして理解していなかった何人かの所有者の手を転々としつつ、1世紀を経て、経済学部の書庫で旧友と再会し、一緒になれたという、強運の持主だと言うべきであろう。

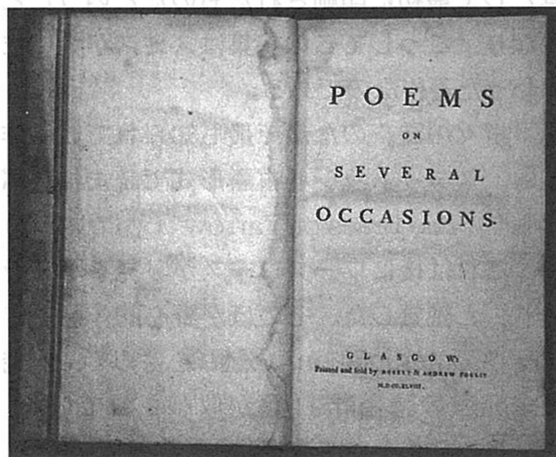
戦後に経済学部で入手した9冊のほかにも、「国富論」をはじめスミス旧蔵書が何度か日本に持ち込まれた。しかし予算に縛られた東大では、速やかに高値で売却したい古書店の理解が得られず、購入できないまま無念の涙を飲んだ経験を私自身もしている。それだけに今回丸善が協力を惜しまなかったことを多としたい。それにしても、本書のような古書資料は一点物であり、またいつ現れるとも分からない性質のものであるから、その入手には文献知識や鑑識眼とともに、一発で採否を

に限らず、書籍資料の蒐集蓄積という仕事にもう少し光が当てられ、理解を得られればと願うのは、私一人だけではあるまい。

もちろん電子化した情報を素早く処理することも重要だが、資料の一葉一葉をめくり、部厚い書物の頁をめくり、時に古い紙の臭いを吸い、紙魚の穴に悩まされつつ、その紙の背後に筆者の人影を感じて思索をめぐらすという仕事もまた、人間探求の営為として大切なものであることを忘れてはなるまい。

ウィンスロウの書物とともに今回加わったハミルトンの詩集は、それ自体がスミスの蔵書ではない。しかしこれはスミスという人物を理解するうえで無視できない意味をもって、私は考えている。

まず作者ハミルトンについて一言説明しておこう。彼は通例 William Hamilton of Bangour (バンガーのハミルトン、1704-1754) と呼ばれ、富裕な家系に生まれ、十分な教育を受けて美文学に通じた詩人であり、またステュアート王家(名誉革命で王位を奪われた)派ジャコバイトに心情を寄せる文化人であった。1745年にステュアート王朝復興を目指してスコットランドに上陸した僭王チャールズ王子が、ジャコバイト軍を率いてエディンバラ入城後、東郊プレスタンパンズに打って出てイングランド・ハノーヴァー軍を



『折々の詩』

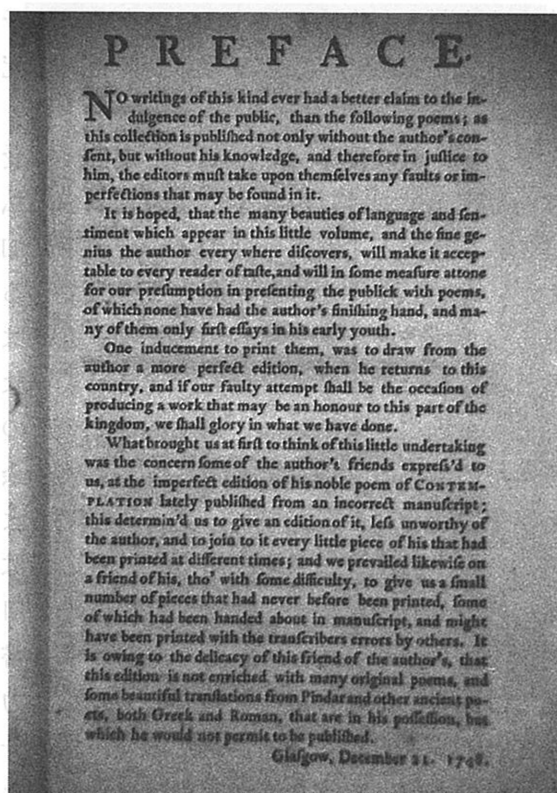
それはともかく、即効性はおよそ期待できないような、何十年も経ってみて初めて入手しておいてよかったと気付くような、長年にわたる渉獵と蓄積の努力の継続を必要とする文献蒐集の難しさを、これまでも経験し、今回もまた経験し、淋しい思いがした。古典籍

撃破した際に、ハミルトンはジャコバイトを讃えた歌 “Ode to the Battle of Gladsmuir” (グラズミュアの戦に寄せて) を発表した。この歌にマックギボンが節をつけ、ジャコバイト派の人々の間に流布したことから、ハミルトンは俄に人々の注目を集めたと伝えられている。もっともジャコバイトの反乱は、一時イングランドに深く攻め入ったものの、結局あっけなく破れ、ハミルトンは彼の歌の故に国外追放の身となってしまった。

ところがスコットランドでは、彼が以前から折々に発表していた詩を集めて出版しようという計画が、ハミルトン自身に知らせることもなく、友人たちの間で進められた。そして、折からオックスフォード大学からスコットランドに戻り、エディンバラ大学で文学について公開講義を行なうなど活躍を始めていた若き日のスミスが、その文学的識見を頼られて、ハミルトンの詩集の編纂に加わったと考えられている。こうして匿名で、しかも作者が係わることなく出版された詩集が1748年刊「折々の詩」(初版)である。

この版本には、これまた匿名で丁度1頁分の「序」がつけられており、それはスミスの筆になるものと信じられている。現にグラスゴウ大学版「アダム・スミス全集」第3巻(1980年刊)では、この「序」を確定的にスミスの書いたものとして収載している。そうであるならば、短いこの序文は、スミスの文章として最初に印刷されたものだということになり、こうしてこの詩集はスミスが大いに係わった著作なのである。

「折々の詩」のなかで最も知られている作品は、スコットランド古語形式で読まれたバラード “The Braes of Yarrow” (ヤロウの堤) で、これは後にワーズワースが「見事なバラード」と絶賛した。そのほか野心的作品とされる “Contemplation” (黙想) を含めて、既発表未発表の詩合計41篇が収載されている。しかしハミルトンを有名にした「グラズミュアの戦に寄せて」は収められていない。



『折々の詩』序

ところで奇妙なことには、スミスの蔵書目録にはこの初版は見当らない。スミスが手許に置いていたことを確認できるのは、ハミルトンが1750年に国外追放を赦免されて帰国した後の、しかも1754年に病没した後の、1760年に刊行された第3版である。この版本は、スコットランドに戻ったハミルトンが、自分の知らない間に出版されていた初版に収められている詩について、誤植を訂正し、また一部の作品については増補作詩したものを収めたほか、新たな詩を追加し、合計87篇を収載している。またハミルトンの肖像も加えられた。しかし「グラズミュアの戦に寄せて」はこの版にも載せられなかった。序文は、一部に初版の際のスミスの文言を用いているものの、全体はハミルトンを紹介する平俗な文章で、署名はない。

スミス自身が序を書き編纂にも加わったと思われる初版が、一体なぜ彼の蔵書に見当らないのか、第3版だけがなぜ蔵されていたのか。それはそもそも蔵書目録が不完全なため

なのか、スミスが国外追放中のジャコバイト詩人に係わった証拠を残したくなかったためなのか、それとも別の理由があったのか、定かでない。しかしいずれにせよ、スミス蔵書の可能な限りでの再現という点で、第3版を保存することにも意味があろう。

4. なぜハミルトンを追い求めたか

ところで、スミスはイングランドとの合邦後のスコットランドに生まれ、合邦の経済効果を身をもって体験しながら社会的名声を勝ち得、豊かな生涯を終えたのだが、その若かりし一時期には、スコットランド人として、ジャコバイト思想に少なくとも共感を懐いていたとして不思議はないし、そうだからこそハミルトンの詩集に係わったのであろう。ジャコバイトに対する共感の証しとしての「折々の詩」を、私は一度は手にしたいものだと思っていた。

イギリスの古書店にも探求を依頼しながら時が経つうちに、1973年秋に東京で開催された国際古書展で、たまたま、大きな陳列ケースの片隅に、まるで買手を物陰から密かに

見ているかのように慎ましく並べられている初版本を見付け、胸の高鳴りを覚えつつ即刻買い求めた。丁寧な皮装で大切に保管されていたことが分かる版本である。それからやがて10年を経た1984年暮に、今度はスコットランドの懇意の古書店から、1760年刊第3版が出たことを知らせて来たので、送ってもらった。恐らく古書店の判断で装幀し直されたもので、初版のような風格は備えていない。

ともかく「折々の詩」の探索は前後約30年に及んだが、1758年に出版された第2版には未だにあえない。しかし初版およびスミスが所蔵したものと同本の第3版とがあれば、まずこれで良しと思い、この2冊をスミスに係わる古典籍として経済学部図書館が永く保存してくれることを願った。幸いその願は叶えられたので、これが何らかの形で研究に寄与するとともに、書物の平安を祈りたい。

即効的業績主義もさることながら、悠々と年月に耐える作品を作り、古典を守り、人間の営為の成果を次の世代に伝えることも、現在のわれわれに課された大切な仕事なのではないか。そう信じて止まない。